

西真寺 寺報

平成三十一年 夏号

住職のつぶやき

慈光照護のもと、ご門徒の皆様にはますますご健勝にて念仏相續に御精励のことと、お喜び申し上げます。

先日行われた新年会では、昨年に引き続き「おてらくご」を開催させて頂きました。将来の次世代につなげていく為の課題として、また、「開かれたお寺」のイメージ作りの一環として、落語を始めさせて頂いた訳です。

ご存知のように西真寺は、信濃飯山の藩主であった堀直奇によって建立された寺院であります。

長岡城下町と村上城下町の基礎を作り、新潟港と信濃川水運を整備した堀直奇の父直政は、浄土真宗の僧侶上りの堀秀治の家臣でありました。その関係もあり、当山は、堀家の家中寺であったのです。この為、内陣にある、親鸞聖人御影は、直奇の番頭 早川十郎右衛門が寄進したものです。

また、堀直奇は、徳川家に仕えた「御咄衆」（おはなししゅう）でもありました。落語の祖師は僧侶であります。この「御咄衆」も為政者（いせいしや）の相談相手であり、同朋とも呼ばれ、落語の噺家（はなしか）としての基礎を作ったと言われています。

この堀直奇と当山にまつわるご縁を大切に、次の世代にも伝えていく意味において「おてらくご」開催の意義が深まるものと願います。今後も続けていく所存でありますので、ご理解の程、宜しくお願ひ申し上げます。

無南阿弥陀仏

釋直徳

■影を内に観るか外に観るか②

投影は、自分で気づかないうちに、一時的に他人より自分を優位にし、自らが善人や勝者になることで安心を得る無意識のはたらきと言えるでしょう。この現象の特徴としては、両価性、呪術性、忘却性、優位性、独善性、権威性、閉鎖性、差別性、排他性、秩序性が見受けられ、集団的に伝染することからイデオロギーを生み、戦争を引き起こす要因になると考えられるのです。

クライン、≡は乳児の内的世界で起こる投影の両価性について、乳児を満足させる「良い乳房」と、欲求不満をもたらす「悪い乳房」の間で起こる分裂（分割）として説明しています。

乳児は、思い通りによく出る母乳の状態では機嫌がすこぶる良くありません。一方、思い通りによく出ない母乳の場合は、泣き叫びます。つまり乳児は、相手や対象を自分の一部や延長として捉え、自分の感情や気持ちを母親に投影しており、不快な感情を相手のせいにするのです。

この理論は人間の根底にある分別の心の原初であると考えられます。乳児は、飢餓状態の防衛本能からおこる不安により、まず目の前にある対象（乳房）を良い乳房と悪い乳房の二つに分け、分裂した自己をいずれかに投影し、対象の属性を取り入れ、同一化して認知します。この分裂↓取り入れ↓同一化の過程を経て乳児は、様々な衝動や欲望を支配し統制し、悪い内的な世界から良い部分を守ろうとするのです。

クライン、≡による乳幼児の発達早期におけるこの「妄想—分裂ポジション」という課題では、対象も自己も二つに分裂し、一方を良い対象に対しては過度に理想化されたもの（良い乳房）として捉え、もう一方をすべてが悪い対象（悪い乳房）として捉え、「敵」「悪」として嫌悪させると考えたのです。

この理論における過程は、学校でのいじめの場面でもよく見られる現象です。最初は、いじめを第三者として傍観し、自己と他者である攻撃者とを分割していますが、自分の危機を減らす防衛機制から、その攻撃者と同一化して攻撃者側に回り、いつしよにいじめることで恐怖をさける行動です。いじめは、乳幼児レベルと変わらない精神性の未熟さと脆弱性が同居している原始的な集団的行動である事が理解できます。野田市の小4虐待死の母親が取った行動は、この現象です。

また、投影の基本原理は、インドの龍樹（親鸞聖人が七高僧とする内の一人）の「戲論」^{けろん}でも説明できます。戲論とは、物事や他人に対し、我々が勝手な都合を投影し、現象を歪めてしまう心の仕組みを意味します。戲論をパリー語やサンスクリット語に訳すと、妄想、拡張、多様、虚構などの意味を持ち、「本質を捉えていない」ことを指します。

主体的な自我（はたらくもの・能）が、客体としての他者（はたらくられるもの・所）を捉えることで投影が生まれ、自己（主客）の相関関係が生じます。自我（主体）が他者（客体）を所有し（傍観者になる）、自我が他者を取り入れる（自己の延長と捉える）ことから、相互的に作用し「我執」（同一化）が生まれてゆくのです。この過程は傍観する時点で分裂し、取り入れから同一化するという乳児の防衛機制とまったく同じはたらきを示しています。

この相互作用の過程は、親鸞聖人の言う「愛憎違順することは高峰岳山にことならず」（愛執する心は増長し、憎怨はますます高まっていく…「正像末和讃」）によってより理解できます。

これを火と薪の關係に置き換えると、分別固執の心のはたらく火が、はたらかされる薪に縁があつて起こり燃え移り、薪によってますます火は燃えあがるのです。

自我（火）は他者（薪）であり、他者（薪）は自我（火）でもあると

いう相互作用そのものは、実体的に自他の分別を持たないのであり、始まりさえ持たないことになりませう。（中論第十章）

例えば、事大主義とは、勢力を持つ強い者に追従して、信念を持たない弱い者が身を守る傾向を意味します。

歴史上、韓国が中国に対して、外交政策上の知恵として用いられておりましたが、否定的な側面が強調され、現在では、日本とアメリカの關係論としても使われています。

この場合、長いものに巻かれる方に問題があるのか、弱者を巻く方に問題があるのかという議論よりは、両者に立場の違いはありませんが、両者の根本の質は変わらない点から相互關係にあることは確かでしょう。自分を脅かす存在であっても、その攻撃者と同一化すれば自分の身を守ることが出来るという、いじめの同一化と同じ構造です。悪代官と悪商人との癒着や、現代社会における独善的権力者とその側近に見られるように、普遍的な構造と關係性を示しています。

この構造によるはたらくきは、自他ともに良い面と悪い面とが分離し、互いに良い面を守る為に、悪い面同士が互いに同一化してしまうという相互關係となるのです。

大人の事大主義やパワハラは、子供のいじめと同質構造を持つ行為であることが分かります。なぜなら、会社でも事大主義から外れた異質性を持つ社員が、「妄想—分裂ポジション」に陥った不健全な自己愛を持つ上司や同僚から、いじめに遇う事も十分考えられるのです。

「不健全な自己愛」とは、自分の悪い部分を認められず、常に他人に承認を求め、他者を過小評価する肥大化した自己愛を指します。

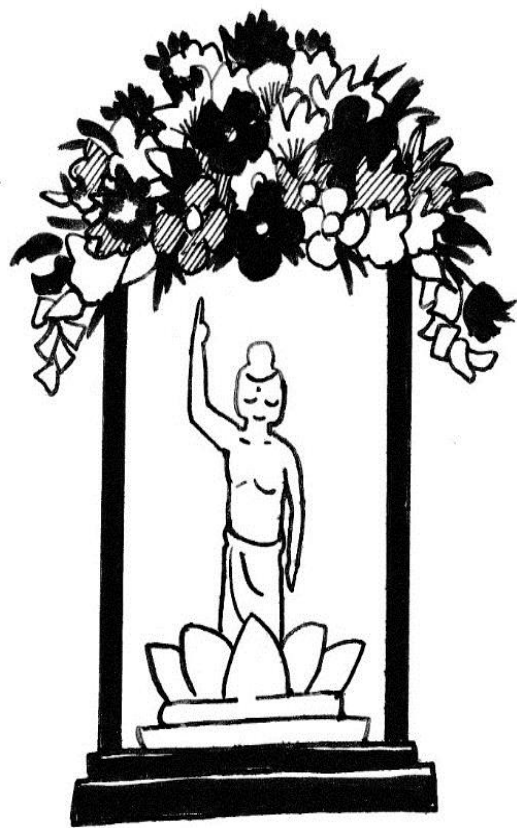
このことはいじめは子供だけの問題では無く、子供を包括する社会全体の体質による行動であることが理解できるでしょう。この体質は、乳児同様に不安な状態から、目の前の自分の利益にしか反応しない稚拙な感情に伴う行動を示しています。

この自他の相互関係によつて生じる両価性を認めず、薪の炎を対岸の火として捉え、他人事であるゆえに、憎怨の炎は燃え盛ります。そして、自分で気づかないうちに苦惱のスパイラルに沈んでしまうのが投影をもたらす自我であり、排他性に転ずる私たちの心のありようです。ネット社会での炎上や、心無い誹謗、中傷はこの現象です。

分別の心（二分傾向）、つまり差別心に沈んでゆく世界の分断は、既に龍樹によつて説かれ、親鸞によつて伝えられていた、心のメカニズムそのものなのです。そして無分別の心こそが、仏教が問う「不二」の思想であり、仏教の根本的立場である「中道」（両極端を離れ、偏らない道）につながるのです。

人間は、大人になつても、いざ極限の不安状況に陥れば（乳幼児の飢餓状態）、その場しのぎの稚拙な感情に支配される本質が表象し、何時でも自らの「影」を他人に投げ付け、排他的立場を選択する側に連なつて行動するのです。この現象こそ、戯論、すなわち虚構であり、妄想であり、本質を理解できない人間のありようなのです。

次にユングの理論を応用して、もう少し我々の持つ根深い本質である「影」について考えてみたいと思います。（次号につづく）



■神道と仏教の関係②

天武天皇の死後、新しい天皇像が求められ、藤原不比等と共に浮上した漢氏らにより、王の世襲性を聖性化し擁護した『金光明経』に基づいた神像イメージが用いられ、その神像が天智天皇時代の男性像から天武天皇時代の女性像に変容した理由であるとされています。

これは瑞穂国を照らし、五穀豊穡をもたらす農耕に根ざした、梵天の配偶神である弁財天べんざいてん（古代インドの母地神）の呪術性（「呪薬洗浴法」）を持統天皇にイメージとして投影し、変容した結果と考えられています。

天照大神が、豊穡をもたらす、作物を実らせ子供をたくさん産む点、降りてくるのが必ず水辺であり、水辺で子供を生んでいる点などは、弁財天の特徴を映し出しており、母地神である天女像に相当する点で、林道義も指摘している通りです。

角林文雄はアマテラスの成り立ちに関して次のように明らかにしています。

その細部のモチーフをみると、東南アジア、中国南部などに一致するものが多く、その系統と思われる。たぶん伊勢・志摩の海人らの伝えた東南アジア系の神話であろう。（中略）天照大神は太陽神でなく、むしろ逆にそれは本来の住まいが洞窟にある地母神的な性格をもっている（中略）つまり、天照大神神話というのは、山の神・日の神信仰を基にして、それをより複雑にしたものを皇室で作り上げたものである。（強調筆者）

習俗化された新羅仏教（私宅仏教）が政治化された百濟仏教（公伝仏教）に変化していった背景がアマテラスの変容に隠されていること

も分かります。

現在でも、神道を基本とする天皇家が、『金光明経』に記されている流水長者の物語に由来する「放生」（生き物を放してやる）の行事を採用していることも、『金光明経』の影響がいまだに残されていることの根拠となります。

また、かつて「秦王国」の神であった宇佐八幡宮の最大の祭事が、この「放生」でもあります。

この段階で、百済仏教系の道慈が舶載した『金光明最勝王経』を取り入れ、百済仏教に服属・変容した過程として推察することが出来るのです。

『金光明経』については、曇無讖訳が現存するサンスクリット原典にいちばん近いものとされ、義浄の漢訳である『金光明最勝王経』では、中国の伝統的な思想が付加されており、道慈が日本に将来した新訳がこれにあたるからです。ここで言う中国の伝統的な思想とは、道教や儒教の影響があるということになります。

筑紫申真も同様に「アマテラスオオカミは、天武・持統両帝がつくったカミです。皇大神宮は、天武・持統両帝が築きあげた神社です。この両帝は、壬申の乱というクーデターを敢行し、身命をかけて二人の政権を獲得しました。その政権を永遠にするために、自分たちの権力の美化に熱心であったのは当然のことでした。なぜなら、この両帝は、日本における最高の古代専制君主であったからです」と述べています。

このように政治による恣意的な専制的太陽神話の成り立ちは、エジプトやインカ古代琉球王国に見られるような統制的な君臨の形成による、国家権力の神聖化を示す史実として成立しているのです。

（次号に続く）

■編集後記

2月の初めに、本願寺派の新潟組の僧侶研修旅行に参加しました。東京の築地本願寺と杉並の和田堀廟所にお参りし、母校の有明キャンパスで、私の恩師の講義を参加者全員で受講することが出来ました。築地本願寺は、古代インド仏教様式の外観で、国の重要文化財に指定されており、和田堀廟所は、築地本願寺の分院の墓所になります。

大正十二年の関東大震災の際に、築地本願寺本堂が類焼し、境内にあった墓地を当時の陸軍省火薬倉庫跡、今の明治大学和泉キャンパス隣に移転したものです。樋口一葉や古賀政男など多くの著名人がこの地を墓所としています。（学生時代、私は明大前に住んでいました！）尚、今の築地の場外市場が以前五十八ヶ寺の寺院からなる築地本願寺の寺内町であったことは、あまり知られていない事実です。

また、築地本願寺境内には、カフェやオフィシャルショップ、ブックセンター、セミナーを開催するギンザサロン、合同墓など新しい施設の他、仏教音楽を既存のパイプオルガンで奏でるランチャタイムコンサートなど、充実した内容で皆さんの参拝をお待ちしています。

都会の騒がしさ中にも静けさがあり、心が落ち着く瞬間を味わうことが出来る体験は貴重です。（会社員の頃、銀座で働いていました！）

この存在価値は、今も昔も変わらずにお寺が担ってきた「癒しの場の提供」です。今回の恩師の講義の中で「日常の心の安らぎや癒しを求める人々の数は、真理や真実・救い・信仰心を求める人々よりは多い」と聞かされました。私にとって、既に頂いていたご縁に気づかず

に過ごしていた愚かさと今後の課題を頂いた研修旅行となりました。

■西真寺

行事のご案内

竹灯籠まつり

十月十二日、十三日（土日）

報恩講

十月十三日（日曜日）

京都本山参詣旅行

十月十六日から二泊三日

合掌 本荘 直広